The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	日本語と「男女の文化」 : 日常語がつくる知識体系と圧力
Author(s)	野呂, 香代子
Citation	待兼山論叢. 日本学篇. 1988, 22, p. 55-75
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/56472
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

日本語 と「男女の文化」

── 日常語がつくる知識体系と圧力 ──

野　呂　香代子

1.　はじめに

人は日々、主に言語によるコミュニケーションを通して社会生活を営んでいる。互いに摩擦のない人間関係を維持するためには、何よりもまず円滑なコミュニケーションを進めることが必要となる。明瞭に事実を伝達することや対人関係を重視することがそのための基本原則となるが、それらが機能する（例えば、話し手の発話が聞き手にとって適切なもの、あるいは丁寧なものとして認識される）には、その基盤に共有の知識が存在しなければならない。そういった知識は、対話当事者だけに共有されるものから、広く世間一般に共有されるものまで様々であるが、後者になるほど誰もが有している知識として当然視される傾向にある。このように当然視される共有知識は、言語学においては「前提」や「含意」という概念について論じられる際に「一般常識」といった表現で触れられるが、それに関し詳しく述べられるようなことはない。

確かにこの“常識”とは「一般の社会人が共通に持っている（持つべき）知識または判断力」（学研国語大辞典）という意味であるが、生活習慣や考え方の異なる人（外国人がその典型となり得る）に出会って何らかの摩擦が生じた時、その常識が普遍的なものではなく、例えば「日本人内で通用する常識」、「会社内で通用する常識」であることに気づくのである。[1)]

そこで、一般常識を「ある特定の集団文化内で共有される知識体系」と捉えた上で、その常識について検討してゆきたい。

2. 研究の概要

2.1. 「言語」と「集団成員」の受動的及び能動的関係

本研究は日々の生活の中で当然視（常識化）されている集団社会の知識体系が主に日常言語により形成されていること、そしてその知識体系が日常言語を通して人々に維持されていることを問題にしようとするものである。言語学においては専ら言語がその研究対象となり、社会学や心理学においては、社会現象や人間がその研究対象となるが、「人は主に言語を通して社会生活を営んでいる」という基本的事実に立ち戻ると、日常言語から社会を観察する意義も大きかろうと思う。

「言語」と「集団（社会）生活を営む人々」の間の関係を見た場合、その関係には受動性及び能動性が認められる。

日常、人々が用いている言語は、その言語が用いられている集団社会の知識体系を表わす典型となる。集団成員は言語を通して各々の社会の知識体系を社会的リアリティ（社会的リアリティに関しては4章参照）として与えられる。その点で成員は言語に対し受動的であるといえる。他方、集団成員は言語の形成に加わることで、集団社会の知識体系形成に、また、言語を使用することで、知識体系維持に能動的に寄与している。[2)]

2.2. 能動性と二種の圧力 ── 問題提起

集団成員は誰でも自ら言語を使用することによって集団社会の知識体系維持につとめているといえるが、与えられた言語、及びそれにより与えられた知識体系内で人々とコミュニケーションを行なうという点、言い換え

れば、それらに従わなければ他の成員とコミュニケーションができないという点で、成員は全て集団の圧力下にあるといえる。

他方、言語形成による能動的参加は、成員全てにより行なわれる類のものではないと考えられる。つまり、言語の形成に参加し、自ら形成した言語及びその言語により構成される世界を維持してゆく勢力的に優位にたつサブ集団と、そういったサブ集団によって形成された言語を所与のものとして、それらを維持してゆくという点でのみ能動的になり得るサブ集団があるように思われる。[3)]

このように、集団の知識体系の維持は当該集団の秩序維持に寄与するとともに優位集団の権力維持にも寄与していると考えられ、そこには二重（二種）の圧力、つまり、優位集団から他のサブ集団への、また集団全体から逸脱者への圧力が働いていると推測される。

2.3. 男女に関わる常識世界 ── 今までの研究

社会は職業、役割、地域、性、年齢等、様々なカテゴリー集団から構成されており、各々の集団には一定の文化（知識体系）が存在する。その中で誰もが日常直接的な関わりをもつカテゴリーの一つが男性、女性という性別であると考え、研究対象を「日本語を話す集団社会における男女に関わる常識世界」に絞った。

日常言語と男女の問題を扱った興味深いものに、D. Spender の Man Made Language[4)] がある。支配集団である男性がことばを用いて、いかに女性像をつくりあげてきたかを英語の世界から説明しようとしたものである。

今、ここでとりあげようとしている日本語関係では、会話分析やテキスト分析という手法を用いて日常的な現象の中に見られる性差別の問題を取り扱ったエスノメソドロジー派の論文が数編見られる。[5)] これらは主

に、優位集団（男性）から他集団（女性）に働く圧力に焦点をあてている。

本研究は、日常の会話やテキストを構成する、より基本的な単位である単語、基本的である故、常識的世界により深く入り込んでいる単語がもつ評価、価値的意味に目を向ける。[6] そして、それらの形成のされ方、さらには、形成された言語のコミュニケーション制御について、集団の圧力、また優位集団の圧力という二種の圧力を念頭において論じる。

2.4. 調査資料

以上の点を検討するにあたって用いる主な資料は二種類のアンケート調査（No.1、No.2）から得られた結果である。（その他随時筆者が採集した談話、辞書、書物、新聞等から得られた語彙を材料とした。）

アンケート（No.1、No.2）の内容について簡単に触れておく。

アンケート No.1（一部）

1．「女」「女性」「女らしい」…ということばを聞いて，何を思い浮かべますか。連想することばや文句をすべて書き出して下さい。
2．「男」「男性」「男らしい」…ということばを聞いて，何を思い浮かべますか。連想することばや文句をすべて書き出して下さい。
3．（男性の方，お答え下さい→）どんなタイプの女の人が好きですか。また，嫌いなタイプは？ （女性の方，お答え下さい→）どんなタイプの男の人が好きですか。また，嫌いなタイプは？
（4．以下省略）

対象：関西、東北、北海道の女性128名、男性170名。学生、会社員、工員、主婦等。10代後半から70代。

目的：「男／女」に関わる連想語の集中状況を見る。（この記述は省略。）また、収集された語彙をプラス／マイナス評価語に分ける。プラス／マイナス評価語は、対人的に用いられる時、成員間の受容／

排除作用と大きく関わってくるので、これらを分析することで前述した圧力の仕組が見えてくるのではないかと考える。

アンケート No.2 (一部)

(　　) の中に『太郎』と『花子』のどちらを入れた方がより適切な文となりますか。どちらかに○をつけて下さい。(どちらでもない場合は空白。)
全て　イメージで答えて下さい。

	太郎	花子		太郎	花子
1.(　　)は視野が広い。	□	□	15.(　　)は涙を流した。	□	□
2.(　　)は子供好きだ。	□	□	16.(　　)は未婚者だ。	□	□
3.(　　)は親切だ。	□	□	17.(　　)はピンクの服を着ている。	□	□
4.(　　)はしゃべりだ。	□	□	18.(　　)はいつも落ち着いている。	□	□

対象：　アンケート (No.1) とほぼ同集団

内容及び記入方式：　性質、行動、能力、服装、職業など、人間に関わる種々の表現を盛り込んだ短文66例を、主に主語の部分を空欄にして呈示した。なお、これらの表現の多くはアンケート (No.1) より得られた語より採用した。回答者は空欄に「太郎」または「花子」を記入する。

目的：　人々の性別に対する認識の一律化の程度を数量で見る。

3.　日常語がつくる知識体系 —— 言語形成と優位集団の圧力

3.1.　「男らしさ」と「女らしさ」の非対称的二元対立

フランス人言語学者、ピエール・ギローは『言語と性』「『女らしさ』の記号論的地位」の章で、「女らしさ」は「男らしさ」と対等に一対をなすものではなく、単に「男らしさの否定形」なのだ、そして、〈管理、指揮能力〉即ち、〈支配的能力〉が男性の属性となることで、〈管理、指揮能力の欠如〉が女性の属性となり、そこから「女性は (中略) 決断し、指揮するよりは、はるかに服従し奉仕するのに適している、という観念」[7] が生み

出される、と述べている。

アンケート（No.1）の結果をプラス／マイナス評価語に分けて分析した結果、このギローの主張との間に興味深い対応関係がみられ、そこから優位集団の圧力の仕組も観察された。

（分析手順）

設問1、2から採集された語を、明らかにプラス評価語／マイナス評価語と認められるものと、どちらともいえない語に分け、後者を考察からはずした。

次に設問3の好きなタイプ／嫌いなタイプから出された語をプラス評価語／マイナス評価語とし、そこから男女共通に用いられる語、例えば、明るい、おもしろい、話の合う／暗い、うそつき、無口、などを除外した。

このように男女に関わるプラス／マイナス評価語を抽出した結果、設問1、2のプラス評価語は3のプラス評価語と重なり、3のマイナス評価語は1、2のマイナス評価語と重なる語群（男／女の属性としてのマイナス評価語）とそれ以外の語群（男／女らしさに違反することによるマイナス評価語）に分かれた。表に示すと次頁のようになる。（**表1**）

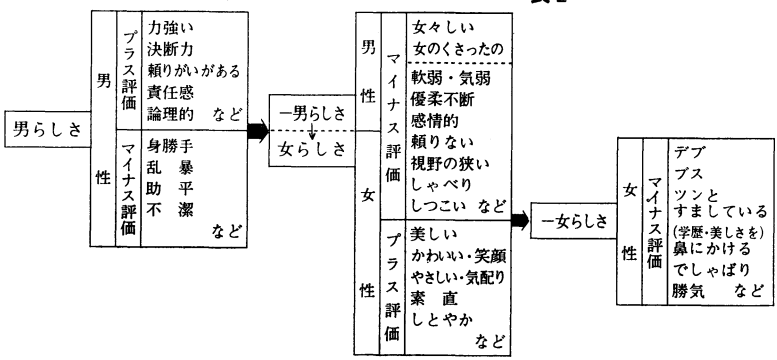
この表と、ギローの主張との間には明らかな対応関係がみられる。〈管理・指揮能力〉〈支配能力）に関わる語は「男らしさ」のプラス評価語となり、〈服従・奉仕〉に適した性格を表わす表現が女性に与えられるプラス評価語となる。また、〈指揮能力の欠如〉は「－男らしさ」つまり「女らしさ」を表わすものであるから、指揮能力の欠如した（＝男らしくない）男性には「女のくさったの」「女々しい」などといったマイナス評価語が与えられる。他方、「－女らしさ」は「男らしさ」とはならずに、女性のみにあるいは女性に多く適用されるマイナス評価語となってあらわれる。

以上のように、言語により体系づけられた「男らしさ」と「男らしさの否定形としての女らしさ」という二元対立からは、優位集団である男性の

「男らしさ」と「女らしさ」の評価言語体系 **表1**

	プラス評価語	マイナス評価語	
男性	男らしさ （支配能力をもつ）		ー男らしさ （支配能力の欠如）
	支配者にふさわしい プラス評価語	支配者に属しやすい マイナス評価語	支配者にふさわしく ないマイナス評価語
	力強い，たくましい，かっこいい，スポーツマン，勇気，決断力，行動力，太っ腹，責任感，根性，正義感，働きもの，心が広い，頼りがいがある，包容力，論理的，客観的判断，やさしい，思いやり　など	自分勝手，乱暴， 攻撃的， 助平，いやらしい 不潔	女々しい，女のくさった， 弱々しい，軟弱， 気弱，意志の弱い， 優柔不断，はっきりしない， 頼りない，無責任， おしゃべり，しつこい， 細かいことにうるさい　など
女性	ー男らしさ（＝女らしさ） （支配能力の欠如）		ー女らしさ
	服従者・奉仕者にふさわしいプラス評価語	服従者・奉仕者に属しやすいマイナス評価語	服従者・奉仕者にふさわしくないマイナス評価語
	美しい，きれい，スタイルが良い，かわいい，笑顔，やさしい，思いやり，よく気がつく，気配り，男をたてる，おとなしい，謙虚，素直，しとやか，家庭的，清潔　など	弱い， 優柔不断，依頼心 感情的，感傷的，ヒステリー 視野の狭い， 意地悪，陰険， おしゃべり，うるさい　など	デブ，ブス，派手，不潔，気取る（学歴，美しさを）鼻にかける，ツンとすましている，かわいくない，でしゃばり，ずうずうしい，タバコを吸う，勝気，気の強い，性格（内面）ブス　など
	設問1.2.3.のプラス評価語	設問1.2.3.のマイナス評価語	設問3のマイナス評価語

マイナス評価語の方向性 **表2**



意向に沿う形で「女らしさ」が決定されていること、女性の視点がこの体系に入り込んでいないことがわかる。こういった非対称性の（評価）言語体系においては、マイナス評価語、つまり、社会的排除を行使する圧力となるものが、男女相互に向けて働くのではなく、「男」から「男の否定形

としての女」へ、「女」から「女の否定形としての“女らしくない女”」へと一方方向に働くような仕組になっている。(**表 2**)

こういった仕組から生じるのが女性の二重拘束という現象である。

3.2. 女性の二重拘束

二重拘束 (double bind) とは、言語的、非言語的に相矛盾するメッセージが同時に伝達される病理的コミュニケーションの一つをいう。

女性が社会的評価 (プラス評価) を受けるためには、「女らしさ」を有していなければいけない。「女らしさ」は「一男らしさ」であり、指揮者的能力を備えていないこと、つまり、「頼りないこと、弱々しいこと」等が「美しい、かわいい、素直」などのプラス評価を受けるための前提条件となる。従って、「かわいい」というプラス評価を受けることは、同時に、「頼りない」というマイナス評価をも受けることになり、そういったマイナス評価から逃がれようとすると、自分の意見をはっきり述べたり、論理的に話をすすめたりしなければならない。しかし、また、そうすることによって「ツンツンしている、学歴を鼻にかけている」等々のマイナス評価を受けることになる。これらは、いずれにせよ、女性は下位者的立場から逃げ場がないという状況を示すものである。マイナス評価から逃がれようとする女性、プラス評価を求める女性は、ますます、女性の下位性を自ら強化するという結果を招いてしまうのである。

3.3. 女性の言語疎外

優位集団 (男性) の見方、価値観が集団全体 (男女) の文化となって言語体系が構成されているということは、女性の視点からは言語が形成されにくいことを意味している。

以下でアンケート結果を基に「性表現」と「結婚」に関連する語彙につ

いて考えてみる。

「女」の連想語からは、色気に関して「色っぽい、セクシー、しっとり、魅力的」などが見られた。また、色気を発する女性の姿を表わしたものに「しぐさ、身のこなし、目線、湯あがり姿」などがあった。これらは、女性を性的対象として観察する男性の視点からつくられた表現であるといえようが、回答は男女双方から出たものである。これに対し、「男」の連想語からは「欲情、助平」などが男女双方からあらわれた。これらは「色気をもつ女性に欲情を感じる男性」といった一方向の見方を、各々客体としての女性、及び主体としての男性について表現したまでのことである。逆方向の男性の色気を表わす語や色気を発する男性の姿を描写する表現は皆無である。このことは、女性が性に関わる分野において、常に受身的であり、造語に全く参加しなかったことを物語るものといえる。男性中心社会の通念として、(特に未婚の) 女性にとって性の世界はタブーであり、その中で、性を積極的に捉えられないようになっているが、言語においては自分の目から見た表現さえ存在しないのである。そして、女性があえて性に関わる表現を用いたとしても、それは男性の視点からつくられたものでしかない。

「結婚」は両性の結合を意味する語であるが、アンケートでは結婚に関わる語彙は圧倒的に「女」の連想語に集中した。結婚はあたかも女性の人生の最大行事であるかのような社会通念が存在するが、アンケート結果もそれを反映しているといえる。[8)]

ここで、アンケート結果や手元の辞書、[9)] また、内省をもとに、結婚あるいはそれを核とした男女の対語について調べてゆくと、以下のようなことがわかる。

まず、明らかな点は、家制度という男性中心社会を表わす婚姻形態が、結婚に関わる語彙の視点と大きく関わり、それが多くの男女非対称語を生

んでいることである（嫁にいく—嫁をもらう／人妻—妻帯者／家内，女房—主人、亭主など)。また、未婚関係で女性に属する非難語が多いのも、女性に結婚を強制する集団社会の圧力があらわれているのであろう（オールドミス、売れ残り、行き遅れなど)。

次に前述の造語との関連で述べると、「夫：妻」「亭主：女房」などの対称語における一方（女性側）の熟語の肥大という点があげられる（夫—亡夫・先夫、妻—人妻・良妻・新妻・若妻・老妻・悪妻・愚妻・先妻・後妻・本妻・正妻・内妻・愛妻・不倫妻）（亭主—関白亭主、女房—姉さん女房・押しかけ女房・恋女房・世話女房)。男性の視点から多くのカテゴリー化された女性が言語化されていることがこれらの例からわかる。様々な表現で女性は描かれるが、男性を多様にカテゴリー化する語は見当たらない。ここにおいても女性は客体として男性に描かれ続けてきたが、決して主体となって「男性を観察して語を形成してゆく」といった造語作業を行なわなかったこと、男性により描かれた自分をあたかも本来の自己であるがごとくそれらの語及び女性観を維持してきたことがうかがえる。

3.4. まとめ

第3章をまとめると、次のようになろう。

—— 集団社会の一つの知識体系である性の文化は、優位集団（男性側）の意志に沿うような形で言語を通して体系づけられている。

—— 優位集団（男性側）の意向に沿った文化体系では、弱者（女性側）がマイナス評価語、すなわち言語的制裁を受けやすい。

—— そういったしくみの中で弱者（女性側）は二重拘束に陥りやすい。

—— 優位集団（男性側）が言語形成を受け持ち、他方（女性側）はそれを維持するだけである。

4. 集団成員のとる知識体系維持の日常的方法 ── 言語維持と集団圧力

4.1. 文化規範と集団圧力

人には自分の態度や意見に妥当性を求めようとする傾向があるが、その妥当性を判断する客観的な基準がない場合、周囲の人々と一致していることが妥当性の拠所となる。このように周囲の人々に依存して確立される内容を社会的リアリティ[10]というが、会話参加者をある集団（文化）に属する成員とみなした場合、こうした社会的リアリティは、集団（文化）規範として機能する集団の知識体系と重なりあうことがわかる。以下で集団共有の知識体系が、成員の言動に基準を与える社会的リアリティとして機能する点に注目して、「知識体系」と並行して「文化規範」という用語も用いることにする。

集団成員はその属する社会集団でできあがった社会的リアリティを前提として話をすすめていこうとする。その時、受け手によりその前提が否定されると、自己の今までもっていた「基準」が脅かされることになり、それが相手に対するマイナス感情（例えばマイナス評価語を用いた非難）となってあらわれ、会話を促進させるラポール（送り手と受け手のあたたかい感情の交流）[11]が消失するという事態が生じやすい。反対に、相手に同調すると相手の社会的リアリティは確認強化されることになり、ラポールは維持される。従って、集団成員との協調性を重んじようとすればその社会的常識に従わざるを得なくなる。こういった状況の背後には、文化規範を維持しようとする集団の圧力が働いており、それが個人の言動を制御しているといえる。

4.2. 単語レベルにおける規範維持

<「男」「女」の二面的意味>

集団文化が前述した集団圧力の中で（男性、女性双方の）集団成員によっていかに維持されているかを主にアンケートにあらわれた様々な言語現象に注目して観察してゆく。

アンケート（№1）の設問1，2で多出した「男／女」の連想語〔男：力強い、たくましい、スポーツ、仕事など。女：長髪、美しい、色気、料理、かわいいなど〕あるいは（№2）で花子側／太郎側に大きく片寄った表現（**表3**）は集団成員のもつ「男女」という単語の意味と密接に結合しているといえる。

太郎／花子側に片寄った表現　**表3**

太郎側に片寄った表現		花子側に片寄った表現	
頼りがいがある	83	きれいだ	92
背が高い	83	ピンクの服を着ている	90
運転がうまい	80	着物が似合う	90
権威がある	78	かわいい	90
会社員だ	76	料理がうまい	86
行動力がある	76	華やかな感じだ	85
けんかが強い	76	しゃべりだ	83
厳しい表情をした	74	よく気がつく	77
医者だ	72	魅力的だ	74
視野が広い	70	適齢期だ	73
スーツがよく似合う	66	ほほえみを浮べた	73
心が広い	65	涙を流した	69
責任感がある	65	スタイルが良い	58
Tシャツを着る	64	清潔だ	57
独身だ	63		
将来性のある子供だ	62		
不潔だ	60		
がん固だ	59		
まじめだ	58		
ひょろひょろした体つきだ	53		

＊枠内の数字は，男女の回答(%)を平均し，太郎側／花子側回答の差を計算したものである。
＊回答の差が50%以上になったもののみを示す。

「女は美しい／女は料理がうまい」「男は強い／男は運転がうまい」などといった表現はよく耳にするが、その時の「男／女」は生物学的に捉え

た男／女をさすのではなく、当該文化においてできあがった知識体系の中にある、いわば虚像の男女をさすものである。しかし、同時に「男／女」という語は生物学的に見た男性／女性をもその意味に含んでいる。

この「男／女」の語がもつ二面的意味の間に、つまり、文化的にできあがった男女の虚像と実際に集団社会で生きる男女の実像との間にずれが存在すると、言いかえれば、「女（虚像）でない女（実像）、男（虚像）でない男（実像）」があらわれると、成員の社会的リアリティが脅かされることになり、その時、集団圧力が生じやすい。

例えば、「料理を作れないのは女じゃない／スポーツができないのは男じゃない」「女／男なら…」「女／男のくせに…」「女／男でしょ」といった表現が逸脱者に対する言語的制裁として現われる。そして、女であれば「化粧すること、清潔にすること、笑顔で接すること…」、男であれば、「酒が飲めること、泣かないこと、十分稼ぐこと…」などの社会的強制が言語を通して実践されてゆく。

＜男と女の有標性＞

この小節では、性別との関わりで現われる有標性／無標性について検討する。

例えば、英語における man と woman など、無標の表現は有標の表現に対する対語として用いられるほか、その上位概念（総称）として用いられることが多いため、そこから、無標表現は「主たるもの」、有標表現は「付随的なもの」といった印象を受けやすい。

男女関係では、3章で見てきたように、強さ、管理能力、技術、仕事など、男性に属すると考えられる分野において男性を示す語は無標形、女性を示す語は有標形がとられることが多い〔(女性) ドライバー、(女流) 作家、(婦人) 労働者、(女性) 社員、(女) 社長、医者：女医、俳優：女優など〕。

また、女性性と職業が結びついたものに「看護婦、保母、主婦」があるが、これらにははじめから女性形のマーカーが入っている。それらの職業に男性が進出する場合は、構造上無標形とはなり得ないので女性形が男性形にとってかわる（看護夫、保夫、主夫）。

反対に、女性に属すると考えられている分野では、男性を示す場合、有標形がとられる（美人—美男子、妾—男妾）。しかし、この場合は、3章でも述べた「女らしさ」の性格上、語の数も限られているようである。

以上から、無標のままでは、集団の知識体系に即した一方の性が想定されてしまうので、成員の知識体系と異なる場合には有標にして対話相手に知らせるというところに有標性の意義があると考えられる。一方、成員の知識体系維持という能動的な面から考えると、有標形にして、性別を明記することで集団の知識体系が矛盾におちいることを防いでいるともいえる。

このことを「ドライバー」に対する「女性ドライバー」について考えてみよう。アンケート（№2）で、「運転がうまい」の割合は、「太郎」が87%、「花子」が7%、「運転がへただ」の割合は、「太郎」が23%、「花子」が70%となった。このことから「運転技術をもつのは男性である」ので、「男性は運転がうまい」、一方、「女性は男性ではない」ので、「運転できない」という思考回路が働くことが予想される。すると「女性ドライバー」自体パラドックスとなり、「たとえ運転できたとしても、ひどいものだ」という意味が含まれることになる。同様に、「美男子」という語についても、男性にそぐわない「弱さ」が含意されることになる。このように、有標形にして性別が明記されることで、「本来属すべきもの」からの逸脱に対する懐疑、軽蔑などの感情が成員に生じ、知識体系の再認識化がはかられる。

4.3. 文レベルにおける規範維持

知識体系は、語や文の接続関係をも決定する。

以下にアンケート（No.1）設問3（好きな／嫌いな異性のタイプ）から抽出した「やさしさ」の伴った表現を数例示す。

男女の知識体系と接続関係〔1〕 **表4**

	男　性 ⟶ 女　性	女　性 ⟶ 男　性
好きなタイプ	やさしくて思いやりのある女性 やさしく素直な女性 やさしい，でもしっかりしている女性	やさしくて頼りがいのある男性 気はやさしくて力持ちの男性 一見冷たそうだが，実はやさしい男性
嫌いなタイプ	やさしさのない女性	やさしいだけの男性

「やさしさ」は男女ともプラス評価語として出てきたが、その深層ではやはり男女の知識体系が作用していることがわかる。女の「やさしさ」には「弱さ」が付随し、男性の「やさしさ」には「強さ」が付随し、それが文の接続関係を決定している。

その他、男女の知識体系が接続関係を規定している例をアンケートより数例示す。

男女の知識体系と接続関係〔2〕 **表5**

	男　性 ⟶ 女　性	女　性 ⟶ 男　性
好きなタイプ	やさしく，細かいところまで気のつく女性 自分の主張をもっているがはっきり出さない女性	やさしく，細かいことに口を出さない男性
嫌いなタイプ	ブスなくせに人を見下したような顔つきをする女性 太っていて性格が悪くブスな女性	色が白くて自分の意志をはっきりいわない男性 ひょろひょろした体つきで頼りがいがない男性

ここでは、各々、男女の虚像、性別に応じたプラス／マイナス評価が順接逆接の基準となっており、男女とも類似の表現がとられている場合でも、性別でその社会的評価が異なる場合、接続関係も逆になっている。

このように、集団成員の知識体系は文法レベルにまで入り込み、語や文

の接続関係を決定する。そこで、性別を入れかえたり、接続関係をかえてみると、笑いをさそう文、あるいは意味をなさない文、つまり、通常のコミュニケーションでは受け入れられない文になってしまう。知識体系からの逸脱は、文法レベルでの誤り、あるいは、不適当な発話文という形でかたづけられてしまうのである。

4.4. 談話における規範維持

以上のように、すでに単語レベルに文化規範が入り込み、文レベルの接続関係も各々の表現の背景にある文化的知識により規定される例を見てきた。このことは、「ことば」は単に伝達の手段であるだけではなく、集団社会の中で類型化された感情、価値観など集団文化を維持する最も基本的な存在物であることを示している。また、ことばにより指示される対象の方も、ことばが含む文化体系の中で（いわば、文化的バイアスのかかった目で）捉えられる。

従って、その成員のもつ基準で対象を把握できなかったり、推論をすすめられない場合、何らかの不安や意外感が生じる。それが談話表面上に現われたのが以下の例である。

（例1）〔小学生と見られる男の子二人の会話〕（路上で）

A_1 ：ええと、（学校のリュックサックは）女子は赤で、男は黒。

A_2 ：あっ違うわ。女子は紺で、男は黒。

B ：ええ！ 女子が紺？ （笑） なんでー？

Aは事実を述べようとしたが、類型化された認識の方が先に口に出てしまったため、すぐに訂正を行なっている。

これは、類型化された認識（女は赤いリュックを持つ）と事実（女のリュックは紺色）とのずれを表わしているといえる。

また、Bの驚き（「ええ！」）、笑い、疑心（「なんでー？」）は、「女は赤

いリュックを持つ」という類型からはずれた事実に対する一連の感情の動きを示しているといえる。

（例２）〔女性の友人同士の会話〕（社内で）

Ａ：（あなた）兄弟いるの？

Ｂ：お姉さんと…

Ａ：いくつ？

Ｂ：30。

Ａ：もう結婚してるの？

Ｂ：ううん、まだ。

Ａ：どこで働いてるの？

Ｂ：学生。

Ａ：うそ！

Ａは、「女は30歳で結婚している」、そして、「もし結婚していなければ働いている」という類型に基づく推論をことば化して、相手との談話をすすめようとする。しかし、類型で推論がすすまなくなり、それが“意外性”（「うそ！」）となって現われている。

（例３）〔母親同士の会話〕（電車内で）

Ａ：けだるいったらない。

Ｂ：でも、いろんな所へ行ってがんばってるらしいやない。

Ａ：いーや、見ててもいらいらしてくる。

Ｂ：でも、女の子やからね。

Ａ：まあね、最後の逃げ道はね。まあ、とにかく自覚がないよね。

Ｂは「女に学問はいらない」という類型化された認識を用いてＡをなぐさめる。Ａはそれに同意する。

（例１）（例２）は驚きを示すことで規範からの逸脱が示されているが、（例３）は同調を示すことで規範の再認識が行なわれている。

以上4章で見てきたように、体系化された文化は、意識的／無意識的に人々の日々のコミュニケーションをあらゆるレベルで制御し、規範に合う形でしか話が円滑にすすめられないような仕組をつくりあげている。

では、このように詳細に至るまで入り込んでいる知識体系から抜け出す方法はないものであろうか。

5. 知識体系の変革 ── 結びにかえて

男女文化体系は、優位集団の利益に沿う形で言葉を通して形成されていること、それが集団の支配的文化となって女性もその文化維持に寄与していることを述べた。

では、いったん体系化された認識は維持され続けるのか、その規範の中で弱者は依然として不利益を自ら維持し続けることになるのだろうか。

集団規範の逸脱者に対して非難を浴びせるなどの罰が加えられるという現実は、裏返してみれば、集団の斉一性への圧力にもかかわらず逸脱者は常に存在するということである。

逸脱者は大きく分けて消極的逸脱者と積極的逸脱者に分けられる。消極的な逸脱者とは自らの価値観の妥当性を集団規範においているにも関わらず、何らかの外的事情で自らの意志に反して逸脱してしまった者を指し、積極的な逸脱者とは自ら別の価値観を持ち、集団規範に対立する立場をとる者を指す。

その積極的な逸脱者の勢力が大きくなった時、非難などの社会的制裁は効力を発しなくなり、今までの体系づけられた規範は崩壊へと向かうと考えられる。

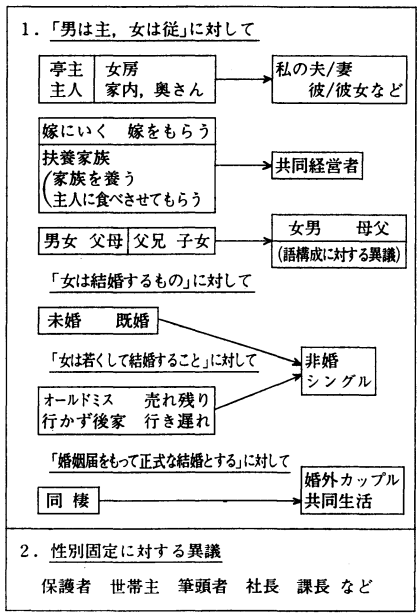
そして、その逸脱者が体系を変革する最も有効な手段の一つは、文化がすでに含意されてしまっている核のレベルである単語に対して、新たな価値観を含んだ単語を造語すること、あるいは、現存する単語に新たな価値

観をふき込むことなどの造語活動にあると考えられる。[12)]

単語レベルの変革 ── 1．単語そのものの入替、2．意味内容が固定されているものの流動化 ── をはかれば、語や文の結束関係にも変化をきたすことになろう。

以下に一部の女性ばかりでなく一般女性も参加しはじめている造語活動を紹介して終えることにする。[13)]

女性の造語活動　**表 6**



注

1) 従って「常識」の研究は異文化コミュニケーション研究の一端となる。(Gumperz & Hymes: Directions in Sociolinguistics p.327参照)

2) こうした考え方は現象学に負うものである。「私達は経験において一方で受動的でありながら、他方において言語を用いて世界の生成に能動的に参画しているのであって、この両義性の弁証法こそが現象学の核心をなすのである。」桜井 (1985) p.31

3) Sacks (1979) は、特に言語形成との関わりからは述べていないが、支配文化（大人や白人文化）により強制される被支配者（子供や黒人）の独立性という問題を取りあげている。"Be a good boy and grow up……That formulation of independance is enforced by the adults." (p.11) この Sacks の問題提起は男女問題を扱う際にも重要な視点となる。

4) これ以前の代表作としては、R. Lakoff (1973) があげられるが、現在支配的な社会の仕組や価値観に批判を加えずに言語を分析した点で、多くの非難を受けている。

5) 江原他 (1984)、好井 (1985)。また、「男」と「女」ということばのカテゴリー化について述べたものに、山崎 (1985) がある。

6) 男女に関わる単語表現に焦点をあてて分析したものに、Guiraud (1978) がある。Guiraud は言語における男女の二元対立の仕組や女性の言語疎外について論じている。

7) Guiraud (1978)。日本語訳 (1982)、p.243。

8) また、アンケート (No.2) で「○○は未婚／適齢期／独身である」という文における主語を問うた結果、未婚（太郎26%、花子64%）、適齢期（太郎9%、花子82%）、独身（太郎78%、花子15%）となった。

9) 大野晋、浜西正人著『角川類語新辞典』(1981) を参照。

10) 小川一夫監修『社会心理学用語辞典』(1987)、p.108参照。

11) 古畑 (1980)、p.124.

12) R. Lakoff (1973) は、これとは反対に "it should be recognized that social change creates language change, not the reverse" (p.76) と述べているが、こうした考え方は「言語がまさしく現実社会をつくっている」とする現象学的見方とは全く異なっている。

13) 以下の語は朝日新聞投書欄、ことばと女を考える会『国語辞典にみる女性差別』(1985)、遠藤織枝『気になる言葉』(1987)、井上治代『女の「性」を返して』(1986) などを参照した。

参考文献

Berger, Peter L. and Thomas Luckmann "The Social Construction of Reality" New York, 1966。山口節郎訳『日常世界の構成』新曜社、1977。

江原由美子、好井裕明、山崎敬一「性差別のエスノメソドロジー」(『現代社会学』18、アカデミア出版会、1984。

江原由美子、山岸健編『現象学的社会学』三和書房、1985。

古畑和孝編『人間関係の社会心理学』サイエンス社、1980。

Garfinkel, Harold et al., 山田富秋他編訳『エスノメソドロジー』せりか書房、

1987。

Guiraud, Pierre "Sémiologie de la sexualité" payot, 1978。中村栄子訳『言語と性』白水社、1982。

Lakoff, Robin "Language and Woman's Place" in *Language in Society* 2、1973。かつえ・あきば・れいのるず、川瀬裕子訳『言語と性』有信堂、1985。

Sacks, Harvey "On the Analyzability of Stories by Children" in J.J. Gumperz and D. Hymes (ed.), *Directions in Sociolinguistics*, Holt, Rinehart & Winston, 1972。

Sacks, Harvey "Hotrodder : A Revolutionary Category" in G. Psathas (ed.), *Everyday Language: Studies in Ethnomethodology*, Irvinton Publisher, 1979。

桜井洋「現象学と社会学」(江原他編『現象学的社会学』1985)。

Spender, Dale "Man made Language" London, 1980。れいのるず＝秋葉かつえ訳『ことばは男が支配する』頸草書房、1985。

山崎敬一「男と女・ことばという道具立て」(江原他編『現象学的社会学』1985)。

好井裕明「日常的現象としての性差別」(江原他編『現象学的社会学』1985)。

(大学院後期課程学生)